

前編集委員会幹事

日比野直彦 | HIBINO, Naohiko

政策研究大学院大学助教授

「編集者からのメッセージ」は、編集委員会委員が各々の思いを執筆するのが通常であるが、本号は前編集委員会幹事という立場から、今までの編集活動の歩みと今後の発展への期待について書かせていただきたい。

私は、本誌創刊号からの10年来の読者であり、財団法人運輸政策研究機構在職中(本年9月に退職するまでの約3年間)は、論文の投稿、査読、運輸政策研究所の研究報告会、コロキウム、セミナーといった当機構の活動報告をする等、ほぼ毎月、何らかの原稿を書かせていただいた。また、編集にも携わり、発刊する側としても深く関わってきた。さらに、私事でたいへん恐縮ではあるが、表紙の写真に登場させていただいたこともあり、数多くある研究学術誌の中でも、本誌は特別に思い入れが深いものである。この思いの強さゆえ、期待が大きくなるあまり、厳しいことを書いてしまうかもしれないが、その点をご容赦願いたい。

1998(平成10)年7月31日に「運輸政策研究」が創刊されてから、本年はちょうど10年目にあたる。また、1998(平成10)年4月17日に開催された第1回編集委員会から数えると、次回編集委員会で40回目を迎えることになる。編集委員長も次号より交代となることもあり、本号はある意味節目の号であろう。

初代編集委員長は、森地茂先生(当時 東京大学大学院教授、現 政策研究大学院大学教授、財団法人運輸政策研究機構運輸政策研究所所長)、2代目は杉山武彦先生(当時 一橋大学商学部教授、現 一橋大学学長)、3代目は杉山雅洋先生(早稲田大学商学学術院教授)が務められた。編集委員長としてリーダーシップをとり、本誌の目的である「交通運輸政策に関する理論と実務の橋渡しの役を担い、本誌を通じて研究者、政策担当者、企業等の交通関係者の間に、交通運輸政策に関する幅広い議論がなされること」の達成に向けて、その方針を守りつつも、それぞれの個性を出して編集を進めてこられた。森地初代編集委員長が目指した交通運輸政策に関する必読かつ最高レベルの学術誌へと、この10年間で確実に進んできたと思われる。

さて、本稿を執筆するにあたり、これまでの実績を調べたので、ここで紹介させていただく。論文の投稿は、産官学それぞれからなされており、投稿者数は延べ350名を超えている。編集委員会委員数は41名、査読員をお願いした方は延べ544名であり、このような多数の方々を支えられ、本誌は創られてきた。また、第38号までに掲載された論文の数は、研究が87編、報告が48編、論説が18編、紙上討議が2編である。論文の内容は、鉄道あり、バスあり、海運あり、航空あり、制度あり、行動分析ありと、たいへん幅広いものとなっている。過去の掲載状況を見ると、圧倒的

に研究論文が多く、研究学術誌としての役割を果たしてきたと言える。

次に、今後のさらなる発展を期待し、編集に携わった者として、編集委員会、幹事会で交わされた議論を踏まえ、既に着手している改善点や改善すべきと考える項目について述べさせていただく。

1つ目は、投稿から掲載までの時間をできる限り短縮し、時宜を得た論文を掲載すること、2つ目は、これまでに掲載された論文を引用しやすくするために、On Line Journalにすること、3つ目は、読者の声に耳を傾け、その意見を真摯に受け止め、反映していくことである。これら3つの項目について、以下に詳しく記す。

政策研究として、提言を行うタイミングが大切であることは言うまでもない。しかしながら、本質ではない修正に時間を要し、掲載が1号(3ヶ月)遅れてしまった例も実は少なくない。これは、できる限り迅速な対応をしても審査の厳密性、論文としての完成度を過度に求めた結果が引き起こした問題であろう。もちろん、厳密な審査は必要ではあるが、読者、社会のためという視点は忘れてはならない重要なことである。審査の厳密性を損なうことなく、投稿から掲載までの時間をさらに短縮するために、審査項目の再整理、電子メールでの審議の効率化等を幹事会では検討しており、今まさに改善への取組みを行なっている。

優れた論文が掲載され、重要な政策提言がなされたとしても、それらを多くの方々知ってもらえなくては真価が発揮されない。また、さらなる論文投稿へのインセンティブを減らしてしまうことにも繋がりがかねないと考える。本誌は、今までの成果を多くの人に活用していただく段階に入ったと思う。如何にして引用してもらえるかを、真剣に考えることが必要ではなからうか。紙での出版だけに留まることなく、インターネットを活用し、進んで情報を発信する機関であって欲しいと望むのは無理な注文ではあるまい。WEB上で誰もが簡単に閲覧できるシステムの早期導入を期待する。

本誌と読者との距離についても言及させていただく。読者からの意見、特にクレームは、これからの本誌のレベルアップのためには欠かせない要素であると思う。読者の求めるもの、また、時には厳しい意見にも耳を傾ける姿勢を持つことで、さらに充実した紙面づくりができるのではないだろうか。限られた読者の評価に安心することなく、このようなシステムを今後取り入れて欲しいと考える。

最後に、読者、投稿者、編集者のそれぞれの意識が高まることにより、「季刊 運輸政策研究」がさらに発展していくことを心より期待する。